

ご近所力アップをめざして ～住民自治を支える土台づくり～

荒尾菊池水俣連合

久間 康範(荒尾市)
前川 幸輝(菊池市)
元村 仁美(水俣市)



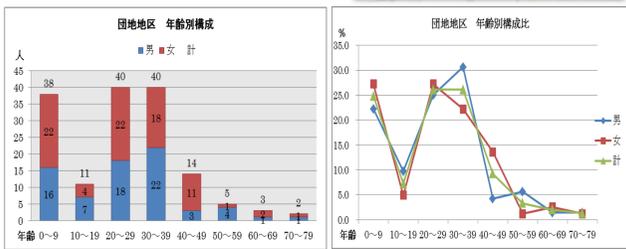
●はじめに

地域コミュニティは、高齢化や核家族化、生活様式や価値観の多様化により連帯が希薄化しており、従前は見られた「近所づきあい」や「助け合い」もなくなりつつある。
このことは、将来的に住民自治の基礎を揺るがしかねないという危機感のもと、現状のライフスタイルに合った住民間コミュニケーションの促進の方策を提案する。

そこで、私たちは住宅部と商店街・農村部という二大区分のうち、ご近所力の差が鮮明に表せるよう、団地地区、新興住宅地区、商店街地区の三つに地域区分に分類し地域コミュニティに関する解析を行った。

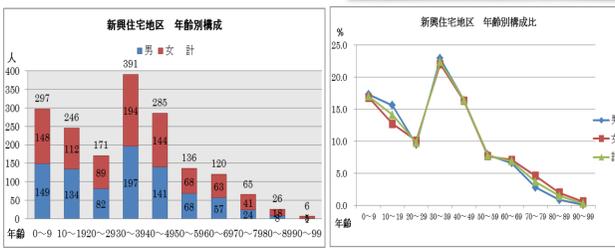
◆団地地区(荒尾市原万田)

居住年数が短く宿泊施設的な考えが強いいため
・地域や周辺への関心が低い
・ご近所付き合いや挨拶が少ない
・子ども会活動や区役が行われていない
・居住者の顔を知らず、来客者との区別がつきにくい



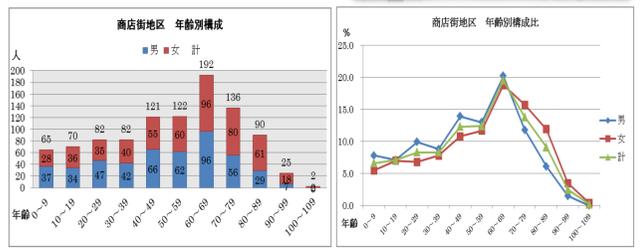
◆新興住宅地区(荒尾市東屋形)

新しく開発された土地で、そこでの理想的な生活を求める者が集まるため
・地域や周辺への関心が高い
・ご近所付き合いや挨拶が頻繁に行われる
・子ども会活動や区役があり、定期的な交流会も行われている



◆商店街地区(荒尾市四ツ山)

長年住んでいて愛着があり転居することを考えていないため
・地域や周辺への関心が高い
・ご近所付き合いや挨拶が頻繁に行われる
・子ども会活動や区役はあるが、少子高齢化のため人手が少なく継続が難しい



●自治意識を向上させるために

荒尾市原万田社宅(団地地区)を自治意識が低下した地域の代表例として検証

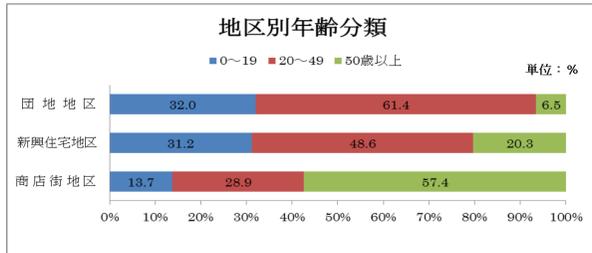
《昔》

炭鉱住宅として家族での入居者が中心で、家の意識が強かった
⇒自分たちで車庫を建てたり、畑を作ったり、集会所での交流があった

入居者の入れ替わりにより
自治意識が低下を招いた

《現在》

病院の社宅として単身者や若年層の入居者が中心で、宿泊施設の意識が強い
⇒既存施設の維持管理や交流がなくなった



グラフより、団地地区は50歳未満の割合が極端に大きく、やり方次第では地域活性化の大きな活力を秘めているとも考えられる。

●ターゲットの抽出と現状

3の解析により、私たちが求めるご近所力のアップの対象を、活動力・繋がり・仕組み全てにおいて弱い『団地地区』とし、ターゲットとして抽出した。

	団地地区	新興住宅地区	商店街地区
年齢層	⇒ 若年(20～30歳代)	⇒ 中年(30～40歳代)	⇒ 高齢(65歳以上)
子ども	⇒ 多い(幼児・小中学生)	⇒ 多い	⇒ 少ない(独立)
活動力	⇒ 弱い	⇒ 強い	⇒ 弱い
繋がり	⇒ 弱い	⇒ 普通	⇒ 強い
仕組み	⇒ 弱い	⇒ 普通	⇒ 強い

結果として



- 自治意識を向上させるためには
⇒ まずは、同じ地域に暮らしているという実感が必要

そこで

- あいさつ→会話→自治意識の芽生え→協力と発展させるために、荒尾市原万田社宅に次の施策を打つ

※地域が自主的にやれない、先頭に立って動く者がいない地域もあり、そこに行政が黒子的立場で施策を打つことも必要

《ぴかぴかぐるぐるまーけっと》

内容: そうじとスタンプラリー、フリーマーケットの組み合わせ
予算4万円～10万円
(清掃用品、のぼり旗、人件費等)

- 自分たちの住む地域を掃除する
- お掃除ポイントでスタンプをもらう
- もらったスタンプはフリーマーケットで好きなものと交換



効果

- そうじ・フリーマーケットで顔見知りになる
- あいさつや会話へ発展
- 声をかけやすくなる
- ご近所や周辺への関心が出る

地域社会が根元から変わり、強大な底上げに繋がる

●まとめ

- これまでの行政
地域のことは地域で決めてもらい、行政は協力する姿勢を保ち、隣近所まで入っていくことはなかった
- これからの行政
ご近所力アップという小さなレベルにも目を向け、行政が地域と共に底上げに繋がる施策を考えて行く

⇒ 住民自治を支える土台づくりを、もう一度、みんなで見直していくべきではないか。

ぴかぴかぐるぐるまーけっとイメージ図

